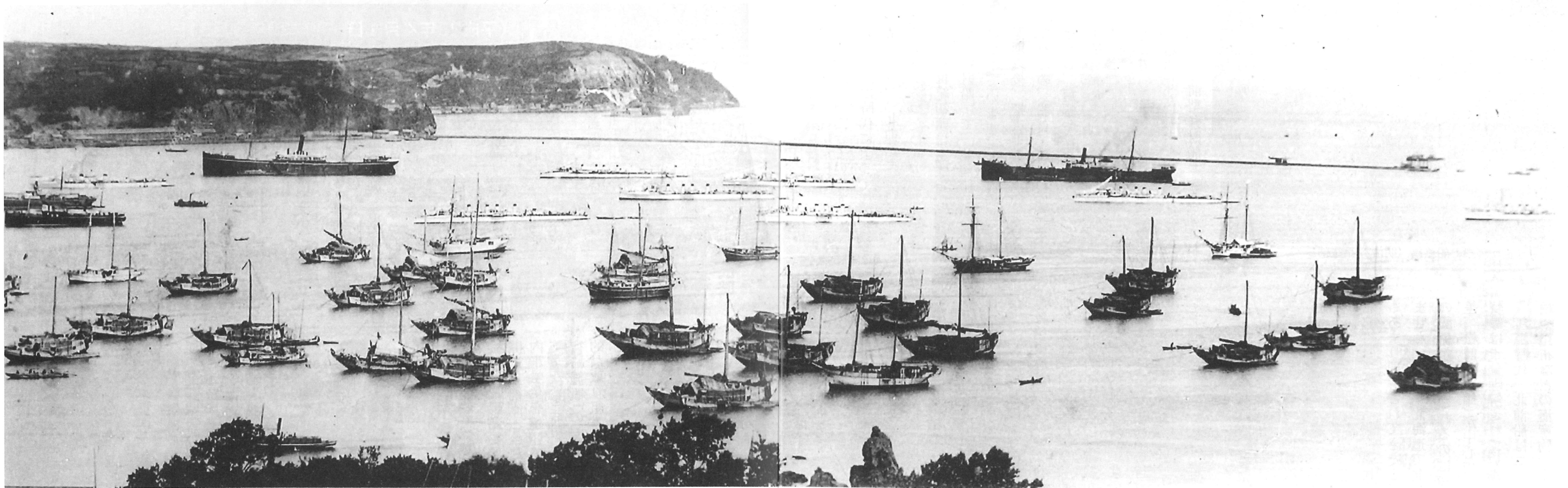




明治36年当時の小樽港の様子。奥には、建設中の北防波堤、手前には、帆を降ろし停泊する多くの北前船が見える。小樽市総合博物館蔵

樽出張所の前の海岸にガラス張りの常夜灯台が設置され、船乗りたちの目印となりました。明治14年の大火後、信香から入船町方面に小樽の中心が移動するとともに、廻船問屋、船宿など是有幌町、港町、堺町などに集まるようになっていきました。

3 小樽に残る北前船の遺産

小樽は、北前船船主の集落ではなく北前船寄港地であり、船主たちの豪華な邸宅があったわけではありませんが、北前船主たちが北海道に進出し、新たな展開を遂げていったことがわかるさまざまな遺産が残されています。小樽の特徴的な景観を形成している倉庫群は、北前船主たちによって建設されています。明治20年代に北前船主たちは、次々と小樽で営業倉庫という新たなビジネスモデルを展開していきました。

北前船主によって建設された倉庫の多くは、小樽市指定歴史的建造物とされています。シンプルな木骨石造の倉庫ですが、シャチホコ、越屋根、二重アーチなどのさ

まざまな意匠が凝らされています。旧小樽倉庫（明治23―27年）、旧増田倉庫（明治36年）は、「北前船の里」として知られる石川県加賀市橋立町出身の船主によって、旧広海倉庫（明治22年）、旧大家倉庫（明治24年）は、同じく加賀市瀬越町出身の広海二三郎、大家七平によってそれぞれ建造されています。旧右近倉庫（明治27年）と旧中村倉庫（明治28年）は、福井県の河野村（現・南越前町河野）出身の船主によって建造され、北陸の船主たちとの深い関係が特徴となっています。

倉庫以外の建築物では、堺町に旧広海二三郎商店（明治44年以前の建築、現・おたる瑠璃工房）、旧塩田別邸（大正元年頃建築、現・夢二亭）があります。旧塩田別邸は大家家などの北陸の北前船主と関係が深い塩田回漕店を経営していた塩田安蔵の別邸です。住吉神社の第一鳥居は、明治31年に大家七平と広海二三郎が共同で寄進したもので、境内には北前船関連の寄進物が多数現存しています。北前船が描かれた船絵馬が、龍徳寺金比羅殿に八面、祝津恵美須神社に二面奉納されています。船絵馬

は、目に見える北前船の遺産として非常に貴重な存在といえます。かつて、立岩通りの先にあった立岩は北前船の船乗りたちのランドマークであり、子どもたちの海水浴場としても親しまれていましたが、大正8（1919）年に埋立て工事で破壊されてしまいました。祝津の日和山は、船乗りたちの目印になっており、明治16年には、灯台が設置されています。

4 「日本遺産」に認定された北前船寄港地と小樽の歴史的価値

「日本遺産」は、文化庁が2015年度に創設した制度で、さまざまな地域の文化財をストーリーとしてわかりやすくまとめ、観光資源として活用することを支援する制度として注目されています。今年認定された北前船の「日本遺産」は、11自治体（函館市、松前町、鰺ヶ沢町、深浦町、秋田市、酒田市、新潟市、長岡市、加賀市、敦賀市、南越前町）の連携によって認定されましたが、今後、関連自治体を追加認定していく形を取っていきます。本稿で紹介したように、小樽は、

北前船寄港地として重要な場所であり、北前船関連文化遺産が多数残されており、また、現在認定されている北陸の寄港地・船主集落との関係が深く、更に北海道開拓期に大きな役割を果たしたという独自の歴史的価値も持っています。本市の北運河周辺地域や港湾は北前船との関係が深く、その歴史的価値を生かすことでより、効果的な活用につながると考えられます。小樽の北前船寄港地としての歴史的価値を改めて再発見し活用していくことは、小樽の地域振興はいうまでもなく、日本の北前船文化の歴史的価値の深化につながっていくといえます。

【参考文献】

- 『北前船と小樽・後志』
（小樽商科大学グローバル戦略推進センター地域経済研究部 2016年）
- 土屋周三 『江戸期と明治期の北前船』
（北海道視座から）
- 『北前船にかかる論考・考察集』
（全国北前船研究会 2016年）
- 中西 聡 『北前船の近代史』
（成文堂 2013年）
- 牧野隆信 『北前船の研究』
（法政大学出版会 1989年）
- 越崎宗一 『新版 北前船考』
（北海道出版企画センター 1972年）